

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集 ブラジルの食料パワー

最新コーヒー・大豆事情

新企画 税務の勘どころ

あの町この町
ペロオリゾンテ



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁



三井物産株式会社 www.mitsui.com/jp



世界の未来を、ブラジルとつくる。

【Business innovation-1】

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

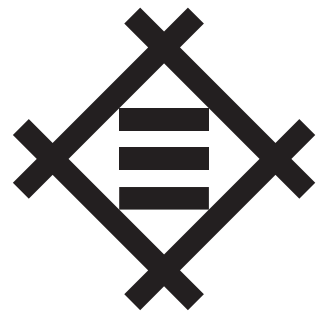
【Business innovation-2】

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

【Business innovation-3】

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

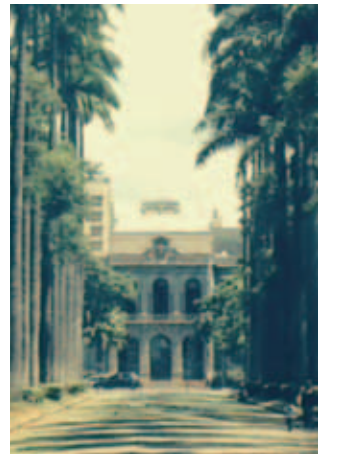
〈あの町この町〉ペロオリゾンテ [高嶋尚生]	3
ブラジル・ナウ サンパウロの水瓶、干上がるカンタレイラを教訓に	5
[堀坂浩太郎]	
【特集】ブラジルの食料パワー 国際市場とブラジル農業 [三石誠司]	6
【特集】ブラジルの食料パワー 最新コーヒー事情 [山村嘉宏]	8
【特集】ブラジルの食料パワー 最新大豆事情 [富倉昌弘]	9
評伝 預言者と故郷 トミエ先生の場合	10
[岡村 淳]	
NPO法人サンパウロ人文科学研究所日本支部発足	11
[栗原 猛]	
連載・ブラジル現地報告 3.15 デモと表現文化の伝統	12
[深沢正雪]	
(日系企業シリーズ・第35回) 半世紀に亘る紡績事業を振り返って	13
[上野秀雄]	
(ビジネス法務の肝) ブラジルでの紛争—訴訟と仲裁	14
[井口直樹]	
新連載★税務の勘どころ ブラジルへの輸入に関連した間接税の現状	15
[エドアルド・ヴィートル／フェルナンド・マグリ]	
(連載エッセイ) ポルトガル語と私 [和泉 聡]	16
(ウーマン・アイ) にもかかわらず [細川多美子]	17
(ジャーナリスト) 勝ち組「M」の告白 [名波正晴]	17
(連載文化評論) カイピラ音楽の元祖歌姫とのお別れと反政府デモ	18
[岸和田仁]	
(最近のブラジル政治経済事情) 2014年のプライマリーバランス(基礎的財政収支)	19
イベント／新刊書紹介／びっくり豆知識	20
協会からのお知らせ	22



写真家田中克佳の
「表紙のひとこと」
コーヒー農園
ミナスジェライス州南部に広がるコー
ヒー農園。なだらかな斜面に沿って無
数の低木が植えられていた。(65年生
まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93
年に退社後渡米し、独立。ニューヨ
ーク在住。www.katsutanaka.com)

ペロオリゾンテ

日本の1.5倍の面積を持つミナスジェライス州はサンパウロ州とリオデジャネイロ州の隣に位置するが内陸なので海がない。『Minas não tem mar, mas tem bar.』(ミナスには、海＝マールはないがBar＝



バールはある)という歌の歌詞もある。その州都ペロオリゾンテ市内には、実際、ハッピーアワーにしっかり冷えた美味しいショッピ(生ビール)が味わえるショッペリア(バール)がいっぱいある。

最初の州都は、17世紀末金鉱山が発見され建設されたオウロプレット。ペロオリゾンテはゴールドラッシュが去った後、1897年に計画都市として制定された。標高850m、年間平均気温22度という爽やかな気候。人口250万人。サンパウロ、リオデジャネイロ、サルバドールに次ぐ第4位の都市。ブラジルでも有力なプロサッカーチームのクルゼイロ、アトレチコミネイロの本拠地でもある。

食べ物も美味しい。市内ではコミーダミネイラ(ミナス州の郷土料理)のお店がいっぱいある。代表的なフェイジョン・トロペイロ(オウロプレット金鉱山からリオデジャネイロまで金を運ぶ人夫＝トロペイロが力をつけるために食べたと言われる栄養満点の豆料理)とフランゴ・コン・キアボ(鶏肉とオクラの煮込み)はなかなかいける。また、地酒のカッシャサ(サトウキビが原料の蒸留酒)の産地としても有名。カシャッサは、大衆のブランドと職人作りの2つに分けられるが、ペロオリゾンテには、後者の伝統的な名酒が何種類も売られている。『美しい地平線』という素敵な名前のペロオリゾンテまでご旅行または出張で来られた方は、是非、お洒落なBar(バール)でショッピ、カシャッサを飲んでコミーダミネイラを味わって頂きたい。



高嶋尚生
(ブラジル住友商事)

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR(Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア8カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

サンパウロの水瓶、干上がるカンタレイラを教訓に

ブラジルの報道は、同国最大の企業ペトロbras(国営石油会社)をめぐる史上最大の疑獄事件と2003年来となるレアル安の話題で持ち切りだ。連日、大物政治家の氏名が次々あがるスキャンダル(事件名 Lava Jato、意味はガソリンスタンドの車洗浄器)は、ブラジルお得意のノーベラ(TVの連ドラ)を見るが如しだし、1ドル3レアルを突破した外国為替は輸入物価を押し上げ日々の生活にも直結する。そのためかブラジル人、特にサンパウロ周辺の住民をやきもきさせてきた水不足のニュースはこのところ影を潜めた感すらする。秋を迎え降雨が増えたこともあり「ひとまず」安心したのかもしれないが、ブラジル人にとっての“雨の守護神”サンペドロ頼みとはいかないようだ。景気浮揚の足を引っ張る構造問題に加え、ガバナンスが問われる事案だからである。

死水を汲み上げての急場しのぎ

水不足を象徴するのが900万人に飲料水を供給してきたサンパウロ最大の“水がめ”カンタレイラである。同市の北方マンチケイラ山脈を水源とする河川に6つのダム湖を敷設し、それぞれパイプラインで繋いだ一大給水システムで、世界でも有数の規模といわれる。急速な都市化・工業化への対応と過去の干ばつ時の苦い経験から、サンパウロ州立上下水道公社 SABESP が整備を進めてきた。2010年には、満水との嬉しいニュースも報じられている。

ところが2013年から急ピッチで水位が下がりはじめ、昨年6、7月のサッカー・ワールドカップ開催時には貯水量が規定量の1割を切り、それ以降は給水口より下部に溜まる死水(volume morto)を汲み上げ急場をしのいでいる。スラムを中心に断水・減水は日常茶飯事。80年ぶりと言われる旱魃が最大の原因とされるが、現職のアルキミン州知事(ブラジル社会民主党、PSDB)が圧勝したものの、国を二分した10月の総選挙で節水など対策が後手後手に回ったのは否めない。

3月中旬には、貯水率の公示数値が検察の手で改めさせられる事態も発生した。SABESP発表の数値(15.3%)には分母に死水部分が含まれていないため、これでは市民を錯覚させると言うわけで、死水部分を含めて11.9%で公示せよという指示である。この一件は、透明性に国民の

関心が集まるブラジルの今日的状況と力をつけた検察の存在を物語っている。検察には、1988年制定の憲法で犯罪事案の公訴に加え、「民主主義制度および社会的・個人的利益の擁護」が新たな職務として付け加えられ、市民生活に直結する問題にもの申す存在となっている。

中央では、労働者党(PT)政権が汚職まみれのペトロbrasをめぐるガバナンスを問われ、サンパウロでは、市民の日常生活はもとより、農業から製造業、サービス産業まで経済全般への影響が無視できない水をめぐる災害対策で、野党(PSDB)州政権がガバナンスを問われる事態となっている。今年、水源地の降雨が平年並みに戻ったとしても、来年3月の貯水量は容量の半分にしかならず、1年で満杯にするには平年の5割増しの降雨が必要といわれる。皮肉なことに水源地から離れた都市部は、しばしば集中豪雨に見舞われている。

同州政府は、新たな水源探しに躍起となっているが、隣接のミナスジェライス州やリオデジャネイロ州との水争いになりかねない雰囲気でもある。

都市インフラに日本の経験を

こうした状況の中で、ブラジルのテレビ局・TVグローボのニュース番組「ジョルナル・ナショナル」は2月に、東京水道局の地道な取り組みを紹介している。漏水箇所を一本一本チェックし、耐震性に優れた管に取り換える光景をルポした東京支局の記者は、「サンパウロやリオの漏水率は30%。それに比べ東京はわずか2%」と驚きの声で伝えていた。

先ごろ仙台で開かれた国連防災世界会議に出席したジム・ヨン・キム世界銀行総裁の東京での記者会見の一言も、ブラジルにとって参考事例となるのではないかと。総裁によると、世界全体では、災害関連予算のうち防災に振り向けられる金額は全体のわずか1割強であるのに、日本では約80%が事前の防災対策に充てられているという。

干上がったカンタレイラは、ブラジルにとって大きな教訓を残し、日本にとっては協力ビジネス推進の余地が大きいことを示す一件といえそうだ。

堀坂浩太郎(協会常務理事、上智大学名誉教授)

国際市場とブラジル農業



三石誠司
(宮城大学教授)

1. 世界の穀物・油糧種子市場とブラジル

食料、特に穀物貿易の世界を俯瞰して理解する場合、良くも悪くも合理的な米国式分類方法が入門編としては容易である。米国農務省(以下 USDA)の分類では、穀物(grain)は小麦、コメ、粗粒穀物(coarse grain)に大別される。粗粒穀物の代表はトウモロコシだが、ここには大麦や小麦、ライ麦、燕麦に加え、コウリャンが含まれる。植物分類を系統別に行えば、トウモロコシとコウリャン以外は小麦を含め麦類でまとめることになるが、小麦とその他の麦類を実際的な重要性に基づき分けている点がいかに米国式である。

この分類は、筆者流に解釈すれば、欧米人の主食としての小麦、アジア人の主食としてのコメ、そして飼料用あるいはその他産業用途としての粗粒穀物となり、ある意味で米国人の世界観・価値観を明確に反映した分類であることがわかる。

一方、ブラジルの代表的作物である大豆は穀物ではなく、油糧種子(oilseeds)という範疇に分類される。USDAが「主要な油糧種子」としている作物(crops)は、大豆、菜種、綿実、ピーナッツ、ヒマワリ(種子)、アブラヤシ、コブラの7品目である。

なお、一般的に作物と言った場合、穀物と油糧種子に加え、芋類が加わるが、本稿では芋類や野菜類等は対象とはせず、先の2つに限って話を進めることとする。

2. 大豆とトウモロコシ

国際的に見た場合、現代のブラジル農業を作物分野で象徴するものは、まず大豆、トウモロコシ、そして品種改良の技術としての遺伝子組換えである。

先に述べた分類に従うと、穀物と油糧種子を合計した世界の年間生産量は約30億トンである(表)。内訳は、小麦が7.2億トン、コメが4.7億トン、粗粒穀物が12.8億トン(うちトウモロコシ9.9億トン)、油糧種子が5.3億トン(うち大豆3.2億トン)となる(いずれも米国農務省2015年3月公表数字、2014/15年度は8月末までであり、まだ終了していないが、本稿では執筆時点の実績として言及している。以下同じ)。

一方、これらについてブラジルの生産量を見ると、小麦

590万トン、コメ830万トン、粗粒穀物7,771万トン(うち、トウモロコシが7,500万トン)、油糧種子9,769万トン(うち大豆9,450万トン)である。

こうした数字は、現代ブラジルの作物生産の構造を明確に示している。

第1に、ブラジルの作物生産の最大品目は大豆であり、世界の約2割を占めている。また、世界の大豆輸出数量は年間1.4億トンであるが、ブラジルは4,608万トンと、米国の4,974万トンに次ぐ第2位の輸出国である。

第2に、トウモロコシは世界で約10億トン生産されているが、現在のブラジルは米国(3.6億トン)、中国(2.2億トン)に次ぐ第3位(7,500万トン)である。これを輸出量で見た場合、生産量第2位の中国が現在は輸出をほぼ実施していないため、ブラジルは米国(4,600万トン)に次ぐ第2位(2,200万トン)の輸出国となっている。生産量の3分の1弱を輸出しているが、数量は米国の半分以下であるため、国際市場ではまだ互角の競争相手という水準には達していない。

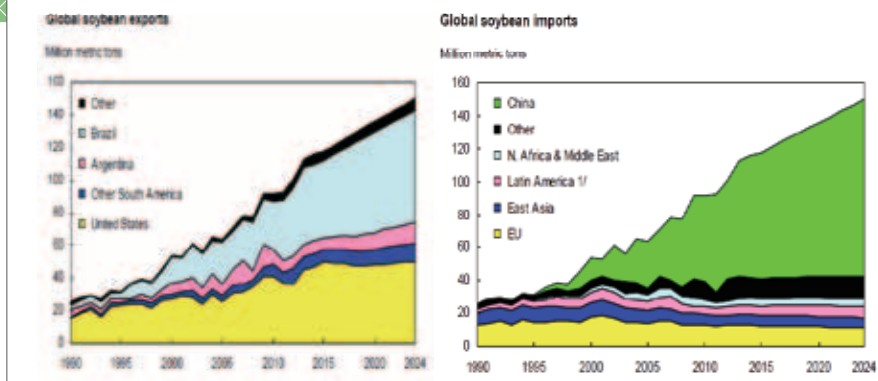
第3に、先に欧米人の主食と紹介した小麦では、残念ながら国際市場におけるブラジルの存在感は皆無に等しい。年間1,160万トンの国内需要に対し、国内生産は590万トン、その一方で670万トンを入力し、150万トンを輸出している。ポジション的には、生産量は中央アジアの中堅国より少なく、輸入面ではアルジェリアやトルコ等と肩を並べる水準であると言える。

第4に、コメの生産量830万トンはほぼ日本の生産量(精米ベースで770万トン)と等しい。需要量は790万トンと、生産・需要ともに国際市場では中堅レベルとなっている。以上より、国際市場から見た場合のブラジルの存在感は圧倒的に大豆中心、そして、将来の大きな輸出可能性としてトウモロコシと考えることができる。

3. 遺伝子組換えと中国

さて、ブラジルの作物生産の主役が大豆である以上、遺伝子組換え品種について一言述べておきたい。国際アグリバイオ事業団(ISAAA)によると、2014年のブラジル大豆の全生産面積における遺伝子組換え品種の作付割合は93.2%、2,907万haである。これは昨年の92.4%、2,695

図：世界の大豆の輸出(左)と輸入の推移 出典：USDA 資料。



万haからわずかに増加している。ちなみにトウモロコシ(夏作と冬作の合計)は、82.4%、1,251万haである。

米国大豆における遺伝子組換え品種の作付割合は、2014年で96%(トウモロコシは93%)であり、今やブラジルもほぼ同水準に達していることがわかる。

一方、国際市場における大豆の輸入という視点で考えると異なる景色が見える。現在、世界で最大の大豆輸入国は中国で年間7,805万トン、全体の約6割を輸入している。中国に次ぐEUは、年間輸入数量1,674万トンと大きく数字が下がる。

この背景として、中国は近年の経済成長とそれに伴う生活水準の向上がもたらす大幅な植物油や家畜飼料の需要増に対応するため、油糧種子はかなり早い段階で国内自給の方針を転換し、その結果が今日大豆の大量輸入国へとつながっていることがわかる。

図を見ると、国際市場におけるブラジルを含めた南米大豆生産国の伸長と、それを需要面から担保する中国の輸入数量の大幅な拡大がよくわかる。いずれにせよ、大豆の生産量と遺伝子組換え品種の作付割合を見れば、最大の生産国と輸入国は明らかであろう。

4. 量産型農業と付加価値型農業

さて、農業生産に限らず、あらゆる産業は、画一的かつ均一な品質の製品を安く大量に提供し、規模の経済を活用することで競争力を付けた工場生産的あるいは量産型パターンと、少数、場合によってはコストをかけても極めて付加価値の高い製品を供給する職人生産型パターンに大別できる。

よく知られた例で言えば、大量生産と職人芸、あるいは、土地利用型農業と付加価値型農業という形の分類に近いかもしれない。日本農業の場合、土地利用型農業の典型は現在苦境に直面しているコメであり、付加価値型農業の典型は一部の野菜や果樹などが思い浮かぶ。

長い目で見れば、現在のブラジル農業は広大な自然資源を活用した土地利用型、つまり原産地の優位性を活用した量産型農業を徹底的に追及した長年の成果がようやく花開

いた段階に来ているものと思われる。

かつて米国がこのパターンで世界の市場を席巻した。その後、米国では環境問題など、このパターンに付随する障害、いわば外部不経済を技術革新や流通の統合などで乗り越えてきている。しかしながら、量産型は、ブラジ

ルという人回り大きな原産地を所有するプレーヤーの台頭により、米国の圧倒的な優位性が崩れてきている。米国の視点で見れば、従来の競争優位が大豆では競争均衡へ、場合によっては競争劣位に陥りつつあるということである。

問題は、地球上で最大にして恐らくは最後の量産型農業の行き着く先がどのようなものになるかであろう。

5. おわりに

かつて市場において圧倒的なパワーを誇った生産者や生産者組織は、今やそのパワーを消費者や消費者組織に譲っている。このパワーシフトには一定の時間がかかる。現代人の多くは、消費者が持つパワーは永続的なものだ誤解しているかもしれないが、パワーシフトは社会や環境、技術等の様々な要因や変化により絶えず引き起こされている。

グローバル化が進展した現代社会では、特定の人や組織、あるいは国家がパワーを持ち続けることなど、中長期で見た場合にはあり得ないと思った方が正解かもしれない。これが意味している点は、国際市場における競争優位の源泉は、今後、確実に「単なる大量生産」から「付加価値型」へシフトしていくということと、その成果を提供できる人や組織、企業などが競争優位を獲得し、持続的なパワーを持つということである。

今やブラジル農業は、規模と潜在性において世界の食料需給に多大な影響力を与えている。これが将来的な競争力を維持・拡大、そして世界全体にとって持続可能であるためには、いずれどこかの段階で原産地優位という与えられた資源への依存から脱却し、更なる付加価値を提供可能とし、米国型とは異なる農業生産の形を求められるのではないかと考える次第である。

表：世界とブラジルの作物生産量(2014/15年見直し)

	世界 (A)	ブラジル (B)	(B)/(A)
小麦	724,759	5,900	8.0%
コメ	474,856	8,300	1.7%
粗粒穀物	1,275,031	77,713	6.1%
油糧種子	532,200	97,690	18.4%
	3,006,846	189,603	6.3%

(単位：千トン)

出典：USDA 資料から筆者作成



最新コーヒー事情



山村嘉宏

(三井アリメントス社長＝三井物産のブラジル関係会社)

世界最大産地、最大市場

「銀ブラ」の語源は「銀座でブラジルコーヒーを飲む」ことだとする俗説があるほど、日本のコーヒー文化形成にブラジルコーヒーが与えた影響は大きい。しかし、今やブラジルは日本にとってだけでなく、世界にとって欠かせないコーヒー産地となっている。ICO (International Coffee Organization) 発表の数字に拠ると、2012/13年のコーヒー生豆世界生産量 145 百万袋 (1 袋＝60gk) の内ブラジルは 35% の 51 百万袋を占めている。より品質が高いアラビカ種に限った場合、世界 89 百万袋の内、ブラジルのシェアは 43%、数量で 38 百万袋にまで達する。また、ブラジルは一大産地であるだけでなく、米国に次ぐ世界最大規模の国内市場も抱えている。前述 ICO に拠ると、2012/13年の世界消費量 142 百万袋の内ブラジル市場は 14% の 20 百袋を占める。

ブラジルのコーヒー栽培は、1727 年にフランス領ギアナからポルトガル軍将校がブラジルに苗木を持ち帰ったことが始まりと言われている。当時、その価値故に各国が国外持ち出しを禁じていたコーヒーの苗木を、同ポルトガル軍将校はフランス領ギアナ総督夫人を口説き、プレゼントとして受け取ることで見事にブラジルに持ち帰ってきたと言われており、なんとも愛の国ブラジルらしい逸話となっている。

ブラジル北部から始まったコーヒーの栽培はその後リオデジャネイロ州、サンパウロ州へと南下し、20 世紀初頭には世界生産量の 4 分の 3 超を生産し、かつブラジル最大の輸出商品となる。その後主要産地をミナスジェライス州に移したコーヒーは、鉄鉱石や石油、大豆等の産業も発達した現代ブラジルにとっては全輸出金額の 2% 超を占めるに過ぎず、かつての勢いは失ったかのように見えるが、今尚農産物としては 5 番目に輸出金額の大きい重要商品とし



ミナスジェライス州の日系コーヒー生産者（7代目）氏、左から二人目）とその家族

てブラジル経済の一翼を担っている。

他産地と比較し、既に圧倒的地位を確立しているブラジルも、品質の向上、産業の効率化等、課題は山積みである。複雑な国内税制度は常に輸出業者の頭痛の種であり、国内ロジスティック及び港湾整備も喫緊の課題となっている。また、品質向上を目指す動きも近年活発化している。ミナスジェライス州セラード地区は、地域のブランド力を高めるべく原産地呼称制度を取り入れ始めている。個々の農家もこれまでの農協頼りきりの状態から脱皮すべく、自らの顔が最終消費者にまで見えるトレー重視の商売を志向する農家も現れ始めている。

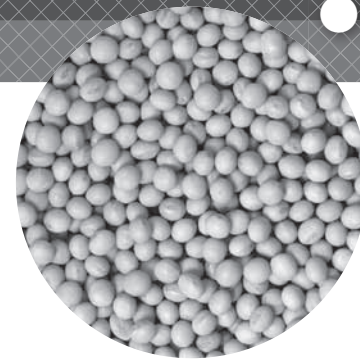
国内市場も輸出部門に劣らずブラジルにおいて重要な産業と見做されている。近年有力メーカーによる M&A が進んだ結果、ブラジルのコーヒー国内産業は各地域に地場メーカーが乱立していた 10 年前とは様変わりし、上位 10 社でシェア 7 割を超える、ナショナルブランドによる寡占化産業に変貌しつつある。また、上位メーカーの力が強くなるにつれ商品開発力やマーケティング力も高まり、加えてブラジルの経済発展も追い風となり、コーヒーの嗜好品化も進行しつつある。

ブラジルコーヒーにとっての日本

まず、ブラジルにとって日本は米国、欧州に次ぐコーヒー輸出先であり、重要な消費者である。ブラジルから見ると輸出量の約 7% が日本向けであり、日本からすると輸入量の 30% 超がブラジル産である。また、開拓者でもある。20 世紀初頭の日本人移民の流入とその労働力は、当時のブラジルコーヒー産業の繁栄を支え、1970 年代に雹害によって大打撃を受けたパラナ州からセラード地区へ入植した多くの日系人は、同地がコーヒー主要産地へと生まれ変わる為の大きな役割を果たしている。

さらには、日本はブラジルのコーヒー文化と伝統を守る一翼も担っている。国内市場において Café Brasileiro というブランド名で焙煎コーヒーを展開しブラジル中の家庭に入り込んでいる Mitsui Alimentos 社も、インスタントコーヒーを展開している Café Iguaçu 社も、日系企業である。

実は銀座で飲むブラジルコーヒーも、ブラジルからの単純な輸入商品ではなく、もっと深いところから日本との関係が始まっているものだと思って飲むと味が変わってくるかもしれない。



最新大豆事情



富倉昌弘

(丸紅(株)生活産業グループ企画部グループ企画課長)

1960 年代に商業栽培始まる

通説によれば、ブラジルに米国経由で大豆を持ち込んだのは、バイーア農学校のグスタヴォ・ドゥトラ教授といわれ、1882 年のことであった。農事試験場における研究材料でしかなかった大豆が、日系移民による味噌醤油原料用の大豆栽培 (サンパウロ州) という初期段階を経て、リオグランデスル州において 1940 年代から限定的な商業栽培が始まり、パラナ州では大豆の植付が開始されたのは 1954 年であった。生産量の推移をみると、1941 年の植付面積 640ha、生産量 450 トン、というレベルから、1960 年 20 万トン、1969 年 105 万トンへと伸長していったが、栽培地は南部に限定されていた。1970 年代になって、それまで不毛の大地と考えられていた中西部のセラード地帯における耕作地開発が急展開し、この農業フロンティア北上による栽培面積拡大と品種改良による単収増の相乗効果によって、ブラジルは世界有数の大豆産出国へと変貌し、1979 年の生産量は 1,500 万トンを凌駕することとなった。更に 21 世紀に入り、バイーア州西北部からピアウイ州南部、マラニャン州南部にかけてのセラード北部が新穀倉地帯となっている。

生産量世界一の米国に迫る

世界の旺盛な飼料需要及び可食油需要に牽引され、ブラジル大豆生産量はこの約 20 年間で 3 倍以上に増加、2014/15 年度の世界大豆生産量は 3 億 1,506 万トンに達する見通しである。その中でブラジルは世界第 2 位となる 9,450 万トンを生産する見通しであり、世界最大の産地国である米国の生産量 (1 億 801 万トン) に迫る勢いで台頭している。全世界における米国の大豆生産シェアは 1990 年代までは 50% 超、2000 年代初頭は 40% 超であったが、ブラジルの生産量増加により米国产のシェアは年々減少。大きな転機となったのは米国が大旱魃に見舞われた 2012/13 年度、米国产大豆生産量が 8,279 万トン (シェア 30.8%)、輸出量 3,585 万トンまで落ち込んだのに対して、ブラジル産大豆は生産量 8,200 トン (シェア 30.5%)、輸出量 4,190 万トンとシェアを大きく拡大し、大豆一大生産・輸出国としての地位を確立した。

主なブラジル産大豆の輸出仕向け国は中国 (約 70%)、スペイン、タイ等であるが、日本も年間約 50 万トンを輸

入する重要な仕向け国である。輸出港としては南東部のパラナグア港、サントス港、サンフランシスコスル港が中心となる。南半球に位置するブラジルでは、北半球では大豆の収穫期である 10 ～ 12 月が播種期、端境期である 2 ～ 4 月が収穫期にあたる。主な生産地域はパラナ州、マツトグロッソ州、マツトグロッソドスル州、リオグランデスル州、ゴイアス州等であり、この 5 州で生産の約 7 割を占める。生産地が内陸中西部に拡大しており、生産地から輸出港までの長距離輸送の大部分をトラックに依存し、物流コストが高いという問題点を抱えるが、近年は港湾インフラの整備等も含め改善傾向にある。

丸紅はブラジル産大豆の将来性に逸早く着眼した。サンタカタリーナ州のサンフランシスコスル港の穀物港湾設備を運営するテルログ・ターミナル社を 2011 年 11 月に完全子会社化。穀物専用の港湾設備とは、トラックや鉄道で輸送されてきた穀物を一時保管するためのサイロ、サイロからバラ積み船の船倉に直接穀物を積み込むためのコンベアのことを指す。この港湾設備を保有することで、ブラジル産大豆を円滑に市場に流し、消費地へのタイムリーな穀物輸送を可能とする優位性を確保。この優位性を最大限活用し、丸紅の 2014 年度のブラジル産穀物輸出数量は 1,300 万トンを超えるまでに至り、10 年前の約 30 倍の規模となった。

果てしない潜在力

加えて、ブラジル産コーンも、生産量、輸出量共に拡大している。2005 年当時、既に 4,170 万トンを生産しつつも、畜産大国でもあるブラジルの飼料用内需が多く、輸出量は 452 万トンにとどまっていた。それ以降、アジア新興国をはじめとした世界需要の高まりに乗じる形で、2014 年度の世界生産量は 8,000 万トンに達し、輸出量も 2,050 万トンと世界輸出シェアの 17.5% を占め、隣国アルゼンチンを凌ぎ世界二位の輸出国にまで登りつめた。その間には、裏作 (冬作) コーンが表作 (夏作) の生産量を上回るものとなり、ブラジルという農業大国の果てしない潜在力を感じさせる一面である。

今後もブラジル流儀のビジネスへのリスペクトをもちつつ、大きく広がるビジネスチャンスをつかんでいきたいと考えている。



港町の雰囲気漂うサントス市の町並み。写真中央がコーヒー博物館 (旧コーヒー取引所)

預言者と故郷 トミエ先生の場合

岡村 淳（記録映像作家・在ブラジル）

今年1月、東京で「ブラジル&メキシコフェスティバル」というイベントが在京の大学生たちの主催で開かれた。中南米料理とドリンクをふるまうこのイベントのゲストのひとりとして在ブラジルの私に声がかかり、『京サンパウロ / 移民画家トミエ・オオタケ 八十路の華』と題した拙作を披露することとなった。

私は2月に訪日を予定していたが、依頼を受けて予定を早めることにした。提示された謝礼の額は成田と会場の往復の電車賃にも満たず、しかも1月はオンシーズンで、ブラジルからの格安チケットを手配するのが困難だったが、学生が主催するという心意気に感じた次第だ。

さてイベントは料理がメインの故か、上映は映写にも音声にも問題があり、心苦しい限りだったが、上映後の質疑応答でそんな思いも吹っ飛んでしまった。来場の女性が自分には実につまらなかった、主催者になぜこんな作品を選んだのか聞きたい、という質問を浴びせてきたのだ。数ある拙作からこれを選んだのは主催者であり、前年にDVDも渡してあるので、いちゲストの私はお答えする立場にはない。

しかし代表の学生はウエイターとして奔走中で、質疑を聞いているどころではなかった。諸々の不備はあったが、就職活動・クラブ活動やアルバイト、プライベートで激忙のなか、せっかくのラテンなイベントを実現させた志が、場違いのクレームで萎縮することのないよう、私が矢面に立つことにした。クレイマーの女性は、ラテンのフェスタなのに作品の主人公が日本人であることが気に入らなかつたらしい。図らずも、拙作の主人公、トミエ・オオタケ先生が101歳の長寿を全うしてサンパウロで亡くなるひと月前のことである。



トミエ・オオタケの代表作の一つ「移民80周年記念オブジェ」



2013年、100歳を迎えるトミエ先生と筆者、トミエ先生のアトリエにて。

ブラジルを代表するアーティストであるトミエ先生の存在と作品は、彼女の祖国日本ではアート関係者にもほとんど知られていないと言っているだろう。なぜ祖国に受け入れられることがなかったのかを、このクレームが象徴しているように思えてならない。

私がトミエ先生の撮影を行なったのは西暦2000年から翌年にかけてで、当時八十代だった先生は、極めてパワフルで「なまいき」という言葉がふさわしいほどだった。日本のテレビドキュメンタリー制作を経てブラジルに移住した私は、取材対象としていわゆる有名人には興味がなかったが、トミエ先生の取り巻きの日本人の名士が、経費は自分たちがなんとかするから、とトミエ先生の取材を持ちかけてきたのだ。移民史上では無名と聞いていい方々の取材をひとりで続けていた私は、同じ視点と距離感で超ビッグなトミエ先生を捉えてみよう、と取り組んでみることにした。しかし発端の名士の方は、取材を開始して私の立替え額がかさんでくると及び腰になってしまい、さらに集めた資金の3分の1は自分がいただくと言い出す始末である。そんなカネは集まるべくもなく、いっぽうトミエ先生ご自身の認めるわがままぶりに私ひとりでは対応しかねて、私は撮影を中止して計画をお蔵入りにすることとした。

その後も気になるアーティストとしてトミエ先生の作品を見続けてきた私は、彼女の作品そのものに心惹かれるようになっていった。アルゼンチン人の精神分析家がトミエ作品は宇宙のマクロ、細胞のミクロのイメージと重なりと評しているが、それが実感できるのだ。

100歳の誕生を迎えたトミエ先生に、私は同じブラジルに生きる日本人として、そして表現者として、未発表の映像を手弁当で編集してお贈りすることにした。すでに車椅子の生活をされていた先生は、映像を見て感極まり、ポルトガル語で望郷の語を叫び続けたという。

軍国日本と京都の名家の呪縛を逃れて、ブラジルで開花したトミエ先生は世俗的な価値（編者註：1988年リオブランコ勲章、2000年勲五等瑞宝章など）におもねることなく、好きな絵を最期まで描き続けた。そのアートは、お先の怪しい祖国日本が滅んだ後も人類の遺産として輝き続けることだろう。

NPO法人サンパウロ人文科学研究所 日本支部発足

栗原 猛（人文研日本支部理事長）

サンパウロ人文科学研究所（通称人文研）日本支部が特定非営利活動法人として認定され、正式に活動を開始した。

ブラジル国サンパウロ市を中心に活動を行っている人文研の前身は土曜会と称し、ブラジルに移住して行った1世、2世の知識人が、ブラジル日本移民がブラジル社会に於いてどのように生きてゆくか、異国の地における人生は何か等を喧々諤々と論議を行っていた勉強会であった。1965年に現在の名称に変え、ブラジル政府に団体として正式に登録して今日に至っている。

人文研50年の活動期間に故人となった半田知雄、斉藤広志、現在も豊饒たる活動を続けておられる脇坂勝則、宮尾進、前山隆、三田千代子、森幸一など移民研究の第1人物が人文研に席を置き、また人文研を通じて研究成果を発信続けている。

ブラジル日系社会も3世、4世と若い世代に続き継がれ幅広い分野での活動を行っており、ブラジル経済界、法曹界、医療学界の牽引役となりブラジル国の発展に貢献していることは喜ばしいことである。反面これらの若い世代は日本語を話すことができるが、読むことが難しい事実に直面しており、祖父母、両親が残した日記など貴重な資料を読むことができぬため、捨ててしまうという勿体ない話が伝わってきている。このことはサンパウロ市内に限った話ではなく、地方都市においても同様な出来事が起こっており、今年創設50周年を迎える人文研にとっても、この貴重な資料の収集、解析も大きな仕事のひとつと考えている。

人文研には6000冊に及ぶ日本語で書かれた移民に関する資料が保管されているが、日系2世、3世の人に日本移民に対して興味を持つ人が少なく、興味を持っても先に述べたように日本語を読みこなすことができず、貴重な資料も有効に活用されていないのが現状である。これらの資料を有効に活用するにはどのようにしたらよいか人文研で検討した結果、やはり日本の若い研究者にブラジルにきてもらい、この資料に目を通して貰うのが1番有効ではないかとの結論に達した。もちろん資料のデジタル化を図り、アー



カイブの作業は進めてゆくが、やはり本物を手にして研究することは最重要であり、多くの若き研究者の来伯が望まれるところである。研究テーマの裏付けとして、また発展させるために渡伯を計画するも、資金面で苦慮している研究者を、送り出す手助けをする活動機関として、人文研日本支部が設立した目的の1つである。

将来ブラジルから日本に勉強に来るであろう研究者の受け入れ窓口ともなり、人文研と日本支部が連携を行ってゆきたいと考えている。今年設立50周年を迎える人文研本部に合わせて日本支部が設立できたことは、日本に於ける出先機関としての役割を担うことができる大きな意義があると思っている。

人文研の基本理念はブラジル日本移民の研究、ブラジルにおける日系移民の研究、ブラジル・日本の交流史、などを掲げて研究を続けてゆくが、日本支部の特色として、日本におけるブラジル日本移民史の研究機関の核となるべく活動をしてゆきたいと考えている。また人文研の前身である土曜会の精神を復活させ、誰もが自由な意見が交換できる勉強会、会合の場を提供してゆきたいと計画している。

と言っても設立間もない日本支部の力は限られたものであること十分承知しており、諸団体、各方面の先生方のご支援を頂きながら、人文研が持つ知識をもって皆様に協力し、活動を続けてゆきたい所存です。

人文研日本支部も会員皆様のご支援で運営されています。人文研の活動主旨にご賛同頂ける方、移民に関心のある方、ブラジルに興味のあるかた、是非とも会員になって頂きたく、日本ブラジル中央協会の情報誌の場をお借りし節にお願いする次第です。

3.15デモと表現文化の伝統



深沢正雪
(ニッケイ新聞編集長)

「連立与党候補が勝ったら、俺はブラジルを去る」。昨年10月の大統領選挙前、ロック歌手ロボンはそう宣言し、話題を呼んだ。でも選挙後、「やっぱり俺は留まる」と翻意した。国を出て解決する問題ではなく、「ブラジルを変えるために残る」という無念の選択だった。中産階級以上に積もり積もったそんな口惜しさが、3月15日の200万人抗議行動の背景にはある。

市民団体がデモを呼びかけ始めたのは2月末、この国はいつでもカーニバル後に新年が始まる。大方の予測ではパウリスタ大通りのデモは4万人程度だった。「大きな節目になるかも」と予感していた筆者は、朝からニュースでデモ動向に注意していたが、数万人規模のものが各地で起きているだけで落胆していた。「サンパウロが口火を切る可能性もある」と最後の望みを託し、午後2時過ぎにリベルダーデ駅で地下鉄にのった。

車内にはサッカーのブラジル代表のユニフォームを着て黄緑の国旗を持つ人が多かった。しかも停車するたびに、どんどん車内が黄色くなる。この瞬間「これはすごいことになる」と直感した。明らかに昨年のサッカーW杯ブラジル代表の試合のとき以上だ。

乗り換え駅パライゾで待っていると、構内看板には奇しくも格差社会の問題を論じた『O capital no século XXI』(21世紀の資本、トマ・ピケティ)の大きな看板が立っていた。

その看板にかぶさるように地下鉄が到着してドアが開くと満員だった。中からはスゴイ声量で「ジルマ(ルセフ大統領)出ていけ!」と乗客が大合唱、車両の壁や天井をゴンゴン叩いて音頭を取っている。もうデモ開始だ。日本の大騒ぎに比べればまったく話題になっていない当地の同書だが、歴史的デモとの組み合わせに「格差大国、の将来を暗示させるものを感じた。

なんとか車内に乗り込むと「エイ、ジルマ。ヴァイ・トマー・ノ・◎ー!」という聞くにたえない罵声連呼と、応援歌「ブラジル人の誇り」の大合唱の繰り返しになった。

大統領にとっては、国民の政治意識の高揚という意味で駅名通り「天国」(パライゾ)、その矛先が自分という意味で行先は「地獄」だ。この罵声と歌は、昨年W杯の開幕試合で大統領に直接浴びせたのと同じ組み合わせ。13年のコンフェデ杯からの延長だとすぐにわかる。

地上に出ると、南米一のクールなビジネス街の表情が一変していた。家族連れや高齢者が多く、まるで田舎のブドウ祭り会場にきたような、のどかさを一瞬感じた。でもすぐに「ジルマ、バンジーダ、ヴォセ・エスタ・フジータ」(悪党ジルマ、お前は終わりだ)などと韻を踏んだリズムミカルなスローガンが大群衆から湧き出てきた。イソギンチャクの触手の様に無数の群衆が一斉に手を振り上げ「歌う」ように共鳴する。

日本のデモが一般に「◎◎は～、◎◎しろっ!」みたいな平板なリズムなのに対し、まるでサンバの様にダイナミックで、詩のように心に訴えるものがある。

3キロ弱もある大通りの端から端、裏道から横道まで人がびっしり。軍警はこの大通り周辺部を合わせて約100万人(ダッタフォーリャは大通りだけで21万人)、全国合計ではその2倍と発表した。

1984年、国民が街頭に出て大統領直接選挙の請願運動をして達成され、軍政から民政に移管された。この国の民主主義は「国民が街頭にでる」ことから始まった。でも、そうして生まれた直接選挙制で選ばれた大統領に対し、92年にはコロール弾劾デモ、今回も汚職撲滅に加え、大統領辞任や弾劾を求めているのは実に皮肉だ。

若いお父さんが肩に子供を担いで、夫婦で参加している姿が目立った。道端に座り込んでいた上品な白人の老婦人同士が、楽しそうに「今日はイイ日ね」と頷き合っている姿に、ブラジル式民主主義の伝統のたくましさを感じた。

カーニバルは街頭で音楽や踊りで表現するマニフェスタソンだが、デモは政治的なそれだ。方向は異なっても「表現文化」という土台は共通していると痛感する。

半世紀に亘る紡績事業を振り返って

上野秀雄
(クラシキ・ド・ブラジル・テキスタイル(有)取締役社長)

06年に合併統合、KBTに

クラシキ・ド・ブラジル・テキスタイル(Kurashiki do Brasil Textil Ltda.)=以下KBTは、クラボウ(倉敷紡績株式会社)のブラジル現地法人である。1957年に設立したラニフィシオ・クラシキ・ド・ブラジル(Lanificio Kurashiki do Brasil S.A.)=以下LKBと、1972年に設立したコトニフィシオ・クラシキ・ド・ブラジル(Cotonificio Kurashiki do Brasil Ltda.)=以下CKBを2006年1月に合併統合してKBTとなった。

LKBはLanificioの名の通り羊毛(La)を原料に梳毛紡績事業を運営する会社である。南伯リオ・グランデ・ド・スル州(RS州)サブカイア・ド・スール市に梳毛紡績工場(現KBTサブカイア工場)を建設、1959年に操業を開始した。クラボウグループの戦後最初の海外進出拠点であり、RS州にとっても同州進出日本企業の第一号であった。当時の日本の紡績業界は戦後復興とともに生産設備を挙げて増強したため設備過剰に陥り、1956年に政府は繊維工業臨時措置法を制定し紡績の設備新增設を禁止した。そのためクラボウは企業発展の緒を海外進出に向け、ブラジルでの梳毛紡績事業の将来性に着目した。一方、RS州はガウショ(牧夫)の地帯で、当時の主要産業は畜産であり州政府は自州の畜産物である羊毛を加工するために日本の紡績会社の誘致を熱望していた。双方の思いが一致しめでたくLKBが設立され、多くの困難に直面しながらも発展を続け今日に至っている。

一方CKBは綿花を原料に綿紡績事業を展開する会社で、パラナ州(PR州)ポンタグロッサ市に綿紡績工場(現KBTポンタグロッサ工場)を建設、1974年に操業を開始した。1970年代初頭は軍事政権の治世が軌道に乗り10%超の経済成長を遂げ、日本企業の進出が相次いだ時期である。日系紡績も前後して進出したがその殆どがサンパウロ州であった。当社はPR州政府の熱心な誘致活動と、同州が優良な綿花の産地であったこと、そしてテキスタイルやアパレルなど繊維産業が集積する大産地であるサンタカタリーナ州(SC)に近いこと、などからポンタグロッサ市に工場を建設した。その後数次にわたり増改築と設備増設を行ったが、1990年には同敷地内に第二工場を建設し、生



産能力の更なる増強を図った。創業当初から高級綿糸であるコーマ糸に特化するという差別化戦略を採りコーマと言えばクラシキというブランドが浸透している。

羊毛も綿花も苦労の連続

羊毛紡績と綿紡績、それぞれの事業で山谷さまざまな出来事があったが、トピックを一つずつ挙げてみる。LKBは原毛の洗浄や糸を染めるのに必要な工業用水は深井戸利用を予定していたが、いざ掘ってみると全く水が出ず断念し、2km離れた河から水を引くことにした。導水管の敷設は多数の個人所有地内に埋設しなければならず、足許を見た地主との交渉は難航を極め、工場開設メンバーは途方に暮れた。市長に懇請し最終的には市が公共水道用地として一括収用した後、その一部を当社に有利な条件で使用許可する、という支援が得られ無事操業に漕ぎつける事が出来た。このとき市長は、「将来必ず必要になる市の上水道設備建設に必要な土地収用である。」との理由から法案を市議会に提出し可決されたのである。

また、CKBは1990年の第二工場建設時にコーロル大統領による金融資産凍結に遭い虎の子の設備資金も凍結され、第二工場は当初計画の約半分の建屋と機械設備で完工とせざるを得なかったのである。

現在は2つの紡績事業を統合してKBTとなって10年目を迎えている。創成期から今日まで半世紀に亘りブラジル政府はじめ地方自治体関係者、地域の皆様、取引先様、ブラジル人ならびに日系人の友情、社員とご家族ほか多くの皆様のご支援で会社が存続・発展できたことに、心から感謝しつつ本稿を締め括りたい。

ブラジルでの紛争 — 訴訟と仲裁



井口直樹
(弁護士。長島・大野・常松
法律事務所パートナー。東大
修士・スタンフォード大学L
LM。スペイン語を活かしラ
米案件を取り扱う)

連載

ビジネス
法務の肝

日本企業はブラジルでしばしば紛争に直面する。数多いのは租税訴訟、労働訴訟である。複雑な税制(州毎に異なる)、相当程度労働者保護に偏った労働法制(連邦統一労働法等)が原因であるが、弁護士数も多く、訴訟をすすめることもあると聞く。ブラジルの法制度の基本は日本と同じヨーロッパ大陸法で、米国のようなディスカバリー(文書開示・デポジション。訴訟に関連する電子メール・文書等を大量に提出したり、関係者の全員をインタビューしたりすること)・民事陪審制度は存在しないが、一般国民のマインドは米国並みに訴訟好きと覚悟しておくべきだろう。

これらの訴訟の回避のためにはどうすればよいのか。日常業務のなかで、労働(雇傭)・租税面のコンプライアンスを徹底する必要がある。そのためにはブラジル弁護士によく相談する必要があるが、弁護士の選別も重要である。一説にはブラジルは米国より弁護士が多いので売込みも激しい。いくつかの大規模事務所は米国留学経験者等を集めてフィー水準も米国並みであるが、少数の優秀層を除けばまだ発展途上のところもある。さらに、地方都市の法律事務所となると、日常的かつ小規模な労務問題程度ならばともかく、複雑な税務問題に十分に対応できるか不安も残る。

企業買収・提携に潜む紛争リスク

やっかいなのは、日本企業自身に直接原因がなくても、買収先企業や提携先企業に税務・労務問題が潜んでいることである。買収すれば、当然に対象企業が怠っていた公租公課や、労働者に対する債務を引き継ぐ。提携であってもその形態によっては「グループ」会社として連帯して責任を負うこともある。これらのリスクは、買収・提携の際に徹底した法務監査(due diligence)によって見つけ出さねばならないし、また、残るリスクについても出来る

だけ売主・提携先に「表明・保証(representation & warranty)」させ、最終的には日本企業が「補償(indemnification)」を受けられるよう、株式売買契約・企業提携契約をしっかりと作り込む必要がある。ところが、「一流」ブラジル法律・会計事務所をリテイニングしていたはずの契約でも、文言の詰めが甘いことも見受けられる。他方、十分な契約文言が用意されている契約は、ブラジル事務所のみならず先進国(欧米・日本等)弁護士も協働していた案件が多いようである。ブラジルは、現在では裁判所は機能しているものの判例の集積は不十分で、また会計基準等の企業取引を支える実務ルールも発展途上であることも相まって、M&A実務は必ずしも成熟しているとは言えない。その隙を突いて、ブラジル当事者がM&A取引前に財務会計データに(あからさまな違法とはいえないまでも)不実な操作を加えることさえ少なくないと言われている。

企業取引の紛争解決としての商事仲裁

M&A等の企業取引に関する紛争は、商事仲裁を選ぶのが無難だろう。前述のように1996年仲裁法(1996年9307号)以降、ブラジル仲裁実務は世界水準に近づいてきた。ただ、日本企業は仲裁のメリットを十分に生かしきれていない。たとえ契約準拠法がブラジル法であっても、ブラジル人を仲裁人を選ぶ必然性はない(どうせブラジル当事者が選任するだろう)。相手方の不実な行為を解明するためには、国際仲裁流の「ディスクロージャー(disclosure)」が必要なこともあるが、ブラジル・ローカル色に染まった仲裁人では多くを期待できない。ブラジルにも一流仲裁実務家が育ちつつあるものの、日本・欧米の視点で国際仲裁を十分に利用するための戦略立案が必要である。

ブラジルへの輸入に 関連した間接税の現状



エドアルド・ヴィトール
(トムソン・ロイター
GTMサービスグローバル
ヘッド)



フェルナンド・マグリ
(トムソン・ロイター
GTMサービスアライア
ンスマネージャー)

ブラジルにおいて輸入を伴うビジネスに取り組む企業が、経営の効率化と業績の改善を確保する上での大きな課題は、輸入に関する間接税制度が極めて複雑であることから生じる「ブラジルコスト」と呼ばれる高コスト構造への対応である。一例を挙げれば、貿易部門に直接インパクトを与える法律改定の月間平均件数は、2014年には81件にも達している。これに加え、現地市場には利用すれば大幅な競争力の向上が得られる制度があるものの、その存在が知られていないという状況がある。

関連法を詳細に理解し、利用可能な機会を特定・利用するとともに、事業と市場の発展に適応した戦略的かつ継続的な間接税計画を策定することが課題解決となる。以下では、間接税の状況と、改善につながる制度などを紹介する。

1. 輸入に対する間接税と税率

現在、ブラジルにおいて輸入品に関わる間接税と料金体制は五つあり、そのうちの一つである輸入関税、すなわち輸入税のみが仕入税額控除による還付を受けることができない。州税であるICMS(商品流通サービス税、州および市の間での商品移送、サービス提供、並びに通信に関わる取引に対する税)を除いて、以下のその他の税は全て連邦税である。IPI:工業製品税/COFINS:社会保険融資負担金/PIS:社会統合計画負担金

また、ブラジルでは2015年1月30日に暫定措置法第668号が公布され、法律第10.865/04号が改定された。この改定により、輸入に対するPIS(社会統合計画負担金)/PASEP(公務員厚生年金負担金)および輸入に対するCOFINS(社会保険融資負担金)の税率が引き上げられることになった。(税率等の詳細は、当協会のホームページでご覧いただけます)

2. HSコードとNCMコードの分類による関税分類表の存在

輸入品に対する連邦税の税率は、全て関税分類表により直接知ることができる。1995年、メルコスール加盟国(アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイおよびベネズエラ)はHSコード(商品の名称および分類についての統一システム)に基づき、NCM(メルコスール共通関税分類)と呼ばれる関税分類法を定めた。NCMは現在8桁で構成されており、最初の6桁はHSコードによる分類、残りの2桁はNCM独自の分類を示している。

なお、ブラジルには例外税率制度も存在し、輸入関税率を一時的に低減する租税上の特別措置がある。

3 政府によるインセンティブ

ブラジルには現在、定められた一部の経済分野に適用される市場インセンティブプログラムが存在する。これらのプログラムを通じ、ブラジル政府は国内市場の当該分野に対する奨励策として、企業に対し輸入税の減税または免税を行う。

4. 自由貿易協定の取り組み

また、ブラジルが多数の国と締結している自由貿易協定(英語の略号ではFTA)の数が19を超えていることも特筆すべき点である。それらの協定は、輸入税の減税措置を定めている。(自由貿易協定の詳細は、当協会のホームページでご覧いただけます)

5. 競争力強化特別関税制度

ブラジルには、輸入関連税の全部または一部の課税停止、または免除を定めた特別関税制度が多数存在する。しかし調査したところ、それら制度は施行されてはいても認知されていないか、あるいはその利用に関して不透明な点があるため、多くの企業により利用されるまでには至っていない。特別関税制度の大半は輸出品の国内生産を主な対象としたものであるため、輸出約定に基づき輸入の際に企業への関税の課税を停止したり、あるいは免除したりする措置を設けている。

6. Siscoservの取り組み

Siscoserv(海外とのサービス、無形取引およびその他の資産変動をもたらす取引の登録統合制度)は、ブラジルの企業、文化・スポーツ・宗教団体、および月間取引額が、3万米ドルを超える個人事業主により実施されるサービスの輸出入に関わる全ての取引に対して政府が新たに定めた義務である。しかしながら、トムソン・ロイター・ブラジルのGTMチームが実施した調査によれば、この新制度の導入から2年が経過した時点においても、企業の半数が制度に完全に適合できていないことが明らかになった。

以上、関連法、施作の継続的な理解と、間接税計画の継続策定が、ブラジルでの輸入を伴うビジネスにおける成功への重要な視点となるのがご理解いただけるだろう。
(英文の全文は当協会ホームページでご覧いただけます)

ポルトガル語と私



和泉 聡
(足利市生まれ、早稲田大卒。
1987年朝日新聞社入社、02
年サンパウロ支局長、13年足
利市長)

2002年4月から2005年8月まで、朝日新聞サンパウロ支局長として、ブラジルに滞在した。役回りは、南米大陸すべての国の政治、経済、社会、事件などあらゆるニュースを記事にすることだ。多い時には月の半分以上を、ブラジル国内や周辺国に取材旅行に出かけた。飛行機内に持ち込めるコンパクトなスーツケースに2週間分の衣類、取材道具を詰め込み、ブラジル北部の町で3日間、ベネズエラに5日間、ペルーに7日間といった具合に渡り歩き、サンパウロに戻る。サンパウロの支局で雑用を片付け、また、同じように取材に出かける、そんな具合だった。

思い出を書き始めればきりが無いが、ここでは「語学」、特にポルトガル語と私自身について書くことにしたい。

朝日新聞特派員なら、相当きちんとした語学教育を受けてから赴任したと推測される方も多いと思うが、現実とは全く違った。赴任直前、慌ててリングフォンの自習教材で、スペイン語を「にわか仕込み」しただけである。むろん、ブラジルはポル語だが、仕事で担当する周辺国はすべてスペイン語だったからだ。

実際の取材作業では、ブラジル国内であれば、サンパウロ支局で現地採用している日系人のアシスタント3人(日本語とポル語が話せる)が通訳兼ガイド役をしてくれた。また周辺のおもな国には、契約している通信員のような人物がいて、取材で訪問するたびに案内役兼通訳を依頼していた。

赴任してから1年ほど、サンパウロでは週に2回、スペイン人の家庭教師に来てもらい、スペイン語のレッスンを受けた。「スペイン語は仕事をしながら覚え、ポル語は生活の中で」と、二兎を追ったわけだが、これがうまくいかない。2つの言葉は文法的にはよく似ているが、音はかなり異なる。家庭教師にスペイン語を習っても、ブラジルでの日常生活で利用することがないから、語学を習得するのに必要な「加速度」が、なかなか伴ってこない。そこで2年目になるころ、身に付け

る語学としてはポル語に集中することにした。家庭教師も、日系ブラジル人に変えた。

そして日本に帰国するころには、「英語よりもできた」と思えるほど、ポル語が身に付いた。一番よかったと思うのは、文法は気にせず、日常生活に必要な表現を丸ごと、コツコツと覚えたことだ。私はいつも小さなメモ帳をポケットに入れておいた。例えば、買い物に行ったスーパーでレジ担当の女性が、商品をかごに放り投げる。「もっと丁寧に扱え!」と叱りたいが、適切なポル語が出てこない。そんなとき、その場で手帳に記しておく。そしてポル語の家庭教師が来ると、メモ帳に沿って、場面に応じた表現を次々と教わる。すると、2、3日もしないうちに、同じような場面に出くわす。そこで習った表現を使うと、一発で身に付く。この繰り返しだった。

ブラジルに赴任する5年前、私は朝日新聞の社費留学生として、ハーバード大ケネディスクールで修士号を取得した。「英語には自信があります」と言いたいところだが、いまだにコンプレックスが残る。それは私の英語は典型的な日本人の受験英語で、文法から入ったせいだと思う。一方、ポル語は「日常生活の必要性からアプローチした」と言えた。だから、しゃべり始める時に臆することがない、文法なんて違って通じればいいや、という気持ちになれる。語学習得方法としては、後者がより近道なのだと身にしみて感じた。

私は朝日新聞社を辞め、縁あって13年5月から、生まれ故郷栃木県足利市の市長になった。心して取り組んでいることの一つに、中学生に自分の人生経験を語るという活動がある。「市長塾」と称して、年5つほどの中学校を回っている。その折、語学習得での苦労話を含めて、自分の海外経験についても話すことにしている。一人でも二人でも、そんな話に刺激を受け、力強く自分の人生を切り開いていく、そんな子供が、自分の故郷から育ってくれればといつも願っている。



細川多美子(「ブンバ」編集長)

にもかかわらず

「なんでそうなの?」聞いたところで答えはないし、やめようと思うのだが、たぶん女の悪いクセでどこか攻め口調になってつい口をついて出てしまう。

1チーム4000人×12チームが2晩かけてパレードを行うリオのカーニバル。あれだけの壮大なパフォーマンスを繰り出しながら制限時間内で終わらせる実行力は並大抵ではない。実は参加する側に回って舞台裏を経験するともっと驚く。パレード本番1時間前ともなると、整列係が「8人横隊に並べ」と何度も何度も確認するのだが、手をつないだ横の列は数えるたびに10人だったり13人だったり、延々できない。幼稚園児以下の無秩序ぶりだ。それでいてパレード全体としての完成度はきわめて高い。そして思う。なんでこの行動力なり知恵なりが国家の発展に寄与しないのか。私の中ではブラジル最大の謎にランクされている。

賛美につけ罵倒につけ、この地での生活は「なんで?」(理論的回答なし)と「にもかかわらず」の連鎖だ。一方の罵り度合いと、もう一方の褒め具合は反比例するので、なるべく「に

もかわらず」のあとにがんばってもらい「ブラジルはいい国だ」と結びたい。それが最近、にもかかわらずダメなことの方が多い気がして、少し憂鬱だ。

サンパウロ市内に自転車専用レーンが設置された。ある朝起きたら、家の前の道路が自転車往復2台分(には少し足りない)幅だけ、べったり赤く塗られていた。その距離があったという間に300キロに達し、その素早さに驚愕した。学校の入り口も車庫も商店の店先も道路の陥没も電柱もおかまいなしの赤い帯は、しかもあちこちで突然途切れる。もちろん使っている人を見ることはほとんどない。結局その無計画な行動ゆえに、司法局から待たがかった。無謀にして無益。だったら他にやることはいくらでもあったでしょうに。

政府への批判、景気低迷への国民の不満が日に日に募るなか、デモ、汚職裁判、マスコミの攻撃は派手に続くが、浄化作用が機能しない。その不愉快で不思議な現象。にもかかわらずの大逆転が来ることをひたすら願う毎日だ。

ジャーナリストの旅路

勝ち組「M」の告白

名波正晴

(共同通信社元リオデジャネイロ特派員。88年同社入社、神戸支局や本社社会部、ハノイ、メキシコ支局など歴任。現在国際情報室次長)

私が「M」と出会ったのは2008年、日本人のブラジル移住100周年連載企画として、戦後の日系社会を揺るがした勝ち組負け組抗争を取材していた時だ。当時90歳近かった彼は1946年、サンパウロで起きた日系社会の幹部襲撃事件に直接関与、後に禁錮刑に服した。一連の事件は臣道聯盟の組織的犯行で「狂信」と断じた大方の見方に強く反発し、日系社会との接触も断った。最後の勝ち組とも言われた。その「M」に会えた。

彼が全身から放つ空気は周囲を圧倒した。一点を凝視し目玉はぎょろりとしめない。「君らに私の気持ちが分かるものか」。そんな鎧に身を固めていた。事件に水を向けた。犯行の理由は?

「日本人として見逃せなかった」。戦後、日系社会の重鎮らが混乱を收拾するため、各地で「敗戦」を説いて回ったのに怒りを覚えた。「日本が戦争に勝ったか負けたか(公

報はなく)私は知らなかった。なのに軽々しく『敗戦』を唱え、日系社会が動揺し皇室を侮辱するうわさが流れた。だれもが嘆き悲しんだ。そうした人々に責任を取ってもらうしかなかった」

「M」は9人弟妹の長男。出稼ぎ目的で36年に一家で移住した。戦時中、日本人は敵性国民となり多くの制約、弾圧を受けた。彼は棉花栽培などでほそぼそと貯金し、帰国に備えた。戦前の皇民教育の下で皇室への暴言は祖国日本に対する侮辱と同じ。それは、最後に戻るべき場所、国の喪失にもつながりかねなかった。

「臣道聯盟の講演会で日本人としての生き方を聞いたことはあるが、所詮は理論だけ。(だれかを襲撃せよと)組織から言われたこともない。臣道聯盟とは無関係だ」

「M」は単独犯行を強調する。しかし、私にはいまでも解せない。人を襲う動機としては弱いのだ。「個人的には被害者の方を大変尊敬していた。ご家族には本当に申し訳ないことをした。しかし、私は日本人として許せなかった…」

「M」は初対面から約1年半後に鬼籍に入った。あの抗争は何だったのか、ごく普通の移住者たちの思いと営み。いまでも事件の関係者の心をたどる私の取材が続く。

カピレーラ音楽の元祖歌姫とのお別れと反政府デモ

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

今日のブラジルにおける音楽シーンでCD売上枚数をベースにジャンル別の人気度を判別するならば、一位はサンバではなく、ボサノヴァでもアシェーでもない。アルバム売上全体の6割前後を占めているのは、演歌のブラジル版といえるセルタネージャである。2015年3月は、その“ブラジル演歌”歌手の訃報が相次いだ月であった。

まず、3月3日。1977年LPアルバム『エストラーダ・ダ・ヴィダ（人生の道）』を40万枚以上売り上げたドゥオ「ミリオナリオ&ジョゼ・リコ」の、ジョゼ・リコことジョゼ・アルヴェス・ドス・サントスが心筋梗塞で亡くなった。享年68歳。カピレーラ（田舎者）音楽が米国のカントリー&ウェスタン風の俗と商業主義ノウハウを導入してセルタネージャ（奥地人）音楽へ“進化”したのが1980年代後半以降であったが、ジョゼ・リコはその第一世代といえる歌手であった。

シネマノーヴォの巨匠ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督は、音楽と映画をこよなく愛する父親の影響でカピレーラ音楽を聴いて育った世代に属するが、1983年に制作したドキュメンタリー『人生の道』において、「ミリオナリオ&ジョゼ・リコ」のショー活動やその合間の日常生活を映像化した。彼らの茶目気ぶりが画像から体感できたためか、ブラジルよりも中国で爆発的にヒットすることになった映画だが、筆者にとってはセルタネージャ音楽を再発見することになった記念すべき佳作であった。

ジョゼ・リコの永訣から5日後の3月8日、まさに「国際女性デー」の日に、新たな訃報が入ってきた。カピレーラ音楽の歌姫と呼ばれたイネジータ・パローゾが呼吸不全で亡くなったのだ。享年90歳。

1925年サンパウロで生まれた彼女が、歌手としてデビューしたのは1951年。『ロンダ』、『ランピアウン・デ・ガス』などのヒット曲を連発したばかりか、女優としても活躍していくが、後になって語った彼女自身の言葉によれば、「私はカピレーラたちから差別を受けていた、ギターは女が弾くもんじゃない、と。」すなわち、歌い手も聞き手も農村部の農民やカウボーイが主体という内陸部音楽の、そうした男性

ばかりの世界に女の子がギターを片手に入り込んだのだから、彼女は紅一点の“歌う戦士”でもあった。

サンパウロ大学で図書館学を修めていた彼女は、カピレーラ音楽の学問的な視点からの研究も進め、民謡学・民俗学の教授として大学で長年に亘って教鞭をとったばかりか、TVでは司会・アンカーとして偉才を発揮したのである。筆者もよく見ていた番組だが、日曜日の朝のTVクルソーラ（文化テレビ局）の『ヴィオラ、ミーニャ・ヴィオラ』は、徹頭徹尾カピレーラ音楽の豊饒さを紹介して、1980年から中断なく継続した超長寿番組であった。メカニカルな音響装置に依存した商業化を驚進したセルタネージャを批判し、“手作り”カピレーラ音楽に拘ったのが、名司会者でもあったイネジータであったが、多くの視聴者が彼女を支持したからこそ35年も続いたのだ。

そのイネジータの死から一週間後の3月15日。全国で170とも195ともいわれる数の都市で、反政府デモが展開された。その参加者数は最低でも200万とみられており、2013年6月の反政府デモの倍近い、とてつもなく大規模な反政府行動であった。

では、このデモ参加者が、どんなプロテストソングを歌ったのか。エスタド・デ・サンパウロ紙によれば、ロック歌手カズーザの『ブラジル』（1988年）、レジアウン・ウルバーナの『キ・パイス・エ・エッセ（何て、ひでえ国だ）』（1987年）、そしてシコ・ブアルケの『カリセ』（1978年）、であった。特にシコの歌は、ワイングラスと「黙れ」の掛詞として、当時の軍政による言論弾圧を批判した歴史的作品であるが、今回は、「シコよ、お前こそ黙れ」と現PT政権支持派の象徴的存在であるシコを揶揄したワケだ。軍政批判の歌が、左派政権批判に“転用”されるとは、この豊かなエスプリ精神には脱帽してしまう。

今回の反政府デモ参加者とセルタネージャ&カピレーラ音楽愛好層は相当部分が重複しているのでは、と筆者は睨んでいるが、ともあれ、音楽から覗くブラジルはまた一層面白い。



2014年のプライマリーバランス(基礎的財政収支)

1月29日の財務省発表によれば、2014年の中央政府のプライマリーバランスは172億レアルの赤字（GDP比でマイナス0.34%）となった。ブラジルのプライマリーバランスが赤字となるのは1997年以来で、17年ぶりの赤字転落となった。財務省国庫局の財政収支報告書の要旨は、次の通り。

（1）プライマリーバランス

2014年の中央政府（財務省国庫局、社会保障、中央銀行）のプライマリーバランスは172億レアルの赤字（GDP比でマイナス0.34%）となった。2013年のプライマリーバランスは770億レアルの黒字であったので、一年で、942億レアルも減少したことになる。

（2）歳入

① 2014年の中央政府の歳入は、前年から429億レアル（3.6%）増となった。そのうち、税収入は209億レアルの増加、年金掛金による収入は304億レアルの増加となった。税収に影響を与えるマクロ経済の主要指標が振るわず、しかも減税政策を実施した、というマイナス要因にもかかわらず、歳入増となった。

② その他の税収については、前年比で65億レアルの減少となった。

（3）歳出

① 2014年の中央政府の歳出は、前年比で1170億レアル（12.8%）増となった。人件費は171億レアル（8.4%）増、その他の資本支出は486億レアル（19.3%）増となったことが、歳出全体の増加に影響した。また、裁量的経費についても254億レアル（14.5%）増となった。そのうち、成長加速化計画（PAC）は130億レアル（29%）増となった。

② 2013年7月から行われているCDE（エネルギー開発会計）への補助金支払いは、2014年には92億レアルとなった。また、2013年4月から行われている、一般年金基金の補填のための支出は、2014年には181億レアルとなった。

（4）州及び市政府への資金移転

① 連邦政府から州及び市政府への資金移転については、前年から202億レアル（10.6%）増となった。毎年支払われる憲法及び補足法に定められた地方交付金の増額に加え、州及び市政府への新たな支援措置として19億レアルの移転を実施した。

② その他にも、教育関係者の給与の移転額は前年から18億レアル（19.4%）増、石油のロイヤルティの地方への分配金は17億レアル（7.3%）増、Fundeb（基礎教育

の維持発展及び教師の地位向上基金）への移転額は16億レアル（17.1%）増となった。

ルセーフ大統領支持率の推移

ダタフォリャ社による世論調査によれば、ルセーフ大統領の支持率は急減してきている。ルセーフ政権が「非常によい／よい」と評価した国民は、2014年12月2日の調査では42%であったが、2015年2月2日の調査では23%へ、3月16日の調査では13%となった。同様に、「悪い／非常に悪い」と評価した人たちは、24%⇒44%⇒62%と急増してきている。2月2日の調査の時点では、1999年の通貨危機で苦しんだ時期のカルドーゾ政権支持率以来の悪い数値であったが、3月16日の調査結果は、コーロル大統領の罷免直前（1992年9月）に匹敵する低い支持率となった。

これは全国平均数値であるが、地域別にみても、昨年の大統領選挙でルセーフ大統領の大票田となったノルデスチ（北東部）における不支持率も55%となっており、PT（労働者党）支持者も不支持にかわっていることを示している。不支持の理由については、①ペトロプラス汚職、②景気悪化、③悲観主義の蔓延、④水不足&電力不足、などがあげられている。

経済成長率 0.1%

IBGE（地理統計院）が3月27日発表した、2014年の実質GDP成長率は前年比で0.1%となった。部門別では、鉱業はプラス8.7%、工業はマイナス3.8%、農業はプラス0.4%、サービス部門はプラス0.7%となった。製造業の不振を農業がカバーしたかたちとなったが、その農業も2013年度の成長率7.9%から0.4%へ減少してしまった。

また算出方法を国連や世界各国で採用されている方式に切り替えたことも、従来予想（マイナス成長）を覆して、かろうじてプラス成長にとどまった要因だ。これまで支出に分類されていた鉱物資源の試掘、ソフト開発などが投資にカウントされるようになったからだ。

リオ2016 安全のために 3億5,000万レアル

法務省大規模イベント安全特別局（SESSE）は来年8月開催の2016リオ・オリンピックの準備として、安全対策の装備資機材及び治安当局の訓練に約3億5,000万レアルの投資を行う旨、2月4日発表した。



◆◆◆◆ イベント ◆◆◆◆

講演会

日時：2015年5月20日(水) 15:30-17:00

講師：名波正晴氏(共同通信社編集局次長)

演題：在ブラジル日系社会における、終戦直後の勝ち負け抗争を取材して

会場：米州開発銀行アジア事務所会議室(富国生命ビル 16F)

第33回ランチョン・ミーティング

日時：2015年5月26日(火) 12:00~14:00

講師：Willie Whopper氏(音楽評論家)

演題：音楽でたどるブラジル

会場：シーボニアメンスクラブ

(千代田区内幸町 2-1-4 日比谷中日ビル 1F)

地下鉄「内幸町」駅または「霞が関」駅下車

参加費：会員 3,500円 非会員 4,500円

日伯交流120周年記念日伯国際フォーラム ～グローバル人材の育成と国際交流～

日時：平成 27 年 6 月 20 日(土)

15:00～18:00(開場 14:45 予定)

場所：京都大学東京オフィス品川サテライト

主催：日本ブラジルかけ橋の会

共催：日本ブラジル中央協会

協賛：京都大学大学院総合生存学館

内容：日伯交流 120 周年を迎え、リオデジャ

ネイロオリンピックの 1 年前である 2015

年にあたって、現在までの同国や周辺国と

の長年の人材交流の歴史とその後の人物の

活躍、これからのグローバル人材育成のあ

り方について模索する。基調講演に、日伯

交流の分野に長年携わる藤村修氏(現日本

ブラジル中央協会副会長/元内閣官房長官)

をお招きして、テーマの内容をお話して

いただき、その後日伯交流に関係が深い方々

(人選は調整中)にも登壇して頂く。

参加費：無料

その他：終了後に懇親会を別会場(品川駅

近辺)で企画する予定。

◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆

『ブラジル国家の形成』

(伊藤秋仁、住田育法、富野幹雄、共著)

「現代のブラジルの社会や経済動向を正確に

理解するには、ブラジルの光と影を正視す

る必要がある。また、国家の形成過程の知

識が不可欠であると考え」(はしがき) 著

者たちによる、批判的視座からのブラジル

史叙述である。第一部 歴史編は 1930 年

代まで、第二部 現代編は 1930 年から現

代まで、と、人種問題の経緯と展望、となっ

ており、ブラジル研究の中級コース向け著

作となっている。

(晃洋書房/2015 年 3 月/250 頁/3,200 円+税)

『ブラジルの我が家』(日登美著)

モデル・料理研究家として活躍していた著者

は、33 歳で子連れ(4 人)再婚、パートナー

のドイツ人(数学者)の任地ブラジルへ。サン

パウロ州カンピーナス市近郊に移住し、

そこで 5 人目の男児を出産する。そんな肝っ

玉ママのハチャメチャ日記(ブログ)を一冊

にまとめたもの。初めて出会う素材を創意

工夫して料理に仕上げるプロセス、子供達が

ブラジル風シュタイナー教育で鍛えられて

いく様子などが、しなやかな文体で書き綴ら

れている。凡庸なブラジル入門書よりもは

るかに面白く、観察眼も確か。お勧め図書だ。

(幻冬舎/2015 年 3 月/255 頁/1,400 円+税)

『マジカル・モーメント』

(パウロ・コエーリョ著、山川純矢、山川亜希子訳)

ベストセラー作家コエーリョのツイッター

文章に、韓国人漫画家ファン・ジュンファン

の挿絵を合わせて一冊にまとめた“至言集”

である。サブタイトルが、賢者のつぶやき、

となっているので、そのつぶやきを二つほ

どメモしておくこと、「賢い人はただ愛する。

愚か者は愛を理解しようとする。」「人生は

サッカーのようなものだ。もし最初のいく

つかの痛手に耐えれば、あなたは勝利する

だろう。」賛同するかは、読者の自由だが。

(ダイヤモンド社/2014 年 12 月/286 頁/1,600 円+税)

!!「びっくり豆知識」!!

「F1 大好き、エコカーならもっと好き」

F1(フォーミュラ1)は単なる自動車レースではない。異次元という表現がぴったりくる最先端技術の競争であり、サーキットはその戦場のようなものである。だから F1 は自動車の「カー」ではなく「マシン」と呼ばれる。つまり「機械」なのだ。「キーン」というカン高いエンジン音、唸るような地響きを一度体験すれば、納得すること受け合い。

そんな F1 とブラジル人ドライバーはなぜか相性がいい。F1 が始まったのは 1950 年。今は世界 20 カ国を転戦し、年間の優勝者を決める。歴代年間王者になった人数を見ると、英国が 10 人で断然トップ、次がブラジルとフィンランドの 3 人、そしてドイツ 2 人と続く。ブラジル人ドライバーのランキングは「世界同率 2 位」と言ってもいい。

最も有名なブラジル人は言わずと知れたアイルトン・セナだ。94 年のサンマリノ・グランプリでコース内の壁に激突、事故死した。34 歳だった。悲嘆にくれたブラジル人はサンパウロの高速道路に彼の名前を付けた。

サッカーのペレは「王様」、ジーコは「神様」、ではセナは？

日本の F1 ドライバーの草分け、中嶋悟氏によると「本物の天才」だ。「一歩でも先にいたら絶対抜けない存在」という。70 年代にフィッティバルディが道を開き、ネルソン・ピケがこれに続き、セナは生前、世界一に昇りつめた。マクラーレン・ホンダチームで 88 年に 16 戦 15 勝という、とてつもない記録をつくったこともある。88、90、91 年には年間王者に輝いた。

強い理由は何なのか。ブラジル人のスピード感覚が違うからだと思う。街中での「車線割り込み」は日常茶飯事。筆者は 2 度接触されたが、どうやら当てられる方が悪いようだ。

日本のホンダやトヨタは 08 - 09 年に F1 から撤退したが、ホンダは今年 3 月に復帰した。今の F1 の基準はエコカー。排気量が減り、ターボで加速する新ルールで覇を競う。セナの甥っ子、ブルーノ・セナが F1 から別レースに移籍したのは残念だが、ブラジルはバイオエタノール自動車では世界一。得意技で不景気を吹き飛ばせ！(W)



スペイン・中南米との架け橋として 20 年

スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富な
プロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

中南米の情報提供

スペイン通信社 EFE の情報をもとに
中南米の最新ニュースを日本語で

・中南米経済速報(週刊)
・政治・治安情報“CRONICA”
(月～金の毎日)

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向け
コースも充実の溜池山王教室

www.hispanica-academia.org

・通学
・通信添削
・オンライン ※ポルトガル語は通学のみ

企業語学研修

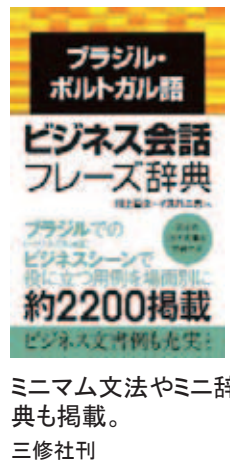
ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に
導く語学力習得をほとんどサポート。実
践的なコミュニケーション力を最大限ひ
きだすレッスンをアレンジします。

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞
典も掲載。
三修社刊

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル1F (銀座線・南北線「溜池山王」駅8番出口前)

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org

JAPAN FOUNDATION 国際交流基金

平成 27 年度(2015 年度)海外派遣日本語専門家(ブラジル派遣)

追加募集のお知らせ

国際交流基金では平成 27(2015)年 10 月(予定)にブラジル・サンパウロへ派遣する
日本語専門家(2 名)を追加募集いたします。

●募集締切:平成 27 年 5 月 22 日(金)必着

詳細な募集要項や応募用紙については以下の URL をご覧ください

http://www.jpjf.go.jp/j/about/recruit/japan_27-2.html

お問い合わせ先

独立行政法人国際交流基金 日本語事業部 事業第 2 チーム 日本語専門家派遣 公募担当

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

E-mail: sakura_adoption@jpf.go.jp / FAX: 03-5369-6040

※ご不明点・ご質問がございましたら、基金ホームページ内の FAQ をご参照の上、メールもしくは FAX にてお問い合わせください。

事務所移転の予定

6月初めに現在の事務所から日比谷通りを挟んで反対側の以下の住所に移転予定。
 [新住所]
 港区新橋1-18-2 明宏ビル本館5階

定時会員総会の予定

6月18日(木) 15:00ー
 米州開発銀行アジア事務所
 (内幸町富国生命ビル16階)
 (役員の交代、定款の変更などを審議予定)

「ブラジル特報」「協会ホームページ」に 広告を掲載しませんか？

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」、及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。
 ブラジル特報は、2014年9月より全面刷新し、発行部数も1500部と大幅に増やしました。5月号からは、ページ数も、16ページから24ページに増やしました。
 ホームページもリニューアルし、明るく、読みやすく、便利なサイトを目指しており、バナー広告も大きく掲載しております。
 広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。

2015年度 ポルトガル語講座

レベルに応じて5クラスご用意しております。

現在開講中の春期講座のほかに、毎年、秋期(9月中旬～11月末)、冬期講座(1月中旬～3月中旬)を開講しています。
 これらに加え、「初心者向け夏期集中講座」「秋期 土曜日講座」などの開講も検討中です。

これからポルトガル語を学びたいとお考えの方、
 覚えたポルトガル語を生かし、スキルアップをしたいとお考えの方、
 是非、ご連絡ください。



法人・個人

新規会員募集中!!

2015年4月末現在、
法人会員98社、個人会員260名。
 皆様のご入会、心より、お待ちしております。



当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に会員となることをご検討いただければ幸いです。

会 員 特 権

- 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
- 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に参加できます。
(会員限定イベントへも参加いただけます。)
- 会員交流懇親会へ参加いただけます。
- ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます。

年 会 費

入会金は不要です。

法人会員	1 口 (2口以上)	20,000円 以上
個人会員	1 口	10,000円

入会に関して、ご質問・ご不明点などございましたら、協会事務局まで、お気軽にご相談ください。

お申込みは
 こちらから

《日本ブラジル中央協会 公式HP》 <http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検 索

スマートフォン・携帯電話の方は、QRコードもご利用ください。



“生きた”ポルトガル語が 身に付く。



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。
 BrAsia(ブレイジア)では、赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
 講師任せにはしない!現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム

■ 赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修(30～50時間)

現地着任前に最低限の準備を! →国内ですべきは独学の準備と自己紹介、タクシー移動もスムーズに!
※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ ブラジル異文化概論&マネジメント講座(半日～1日)

ブラジルの文化、ビジネスの課題を解決! →労働争議は日常茶飯事?各分野の専門講師が課題を解決します!

ブラジルで学ぶ! 短期語学研修プランもご用意!

■ サンパウロ市内提携先での現地語学特訓コース(3～6か月)

キャンパスライフは不要! できればマンツーマンで語学力を一気に高めましょう!

株式会社漢和塾 BrAsia(ブレイジア)事業部 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階 TEL 03-4360-8627

お問い合わせはコチラ! E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com>



BrAsia代表
 小川善久

大阪外国語大学
 ポルトガル・ブラジル語学科
 1987年卒業
 この数年、年に2～3回のペースでブラジルに出張。サンパウロはじめ複数の主要都市を訪問。「事件は現場で起きている!」との考えで、研修会社の責任者としてブラジルを奔走中!



^{てつ}鉄は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。
新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、
“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。
だからこそ私たちは、「鉄」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、
総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。